

「安息日のいやし」

2015年09月15日

ルカによる福音書 13章 10節～17節。安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない。」しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年間も間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

モーセの十戒の第4戒は「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という言葉に始まり、全ての労働を禁止している。礼拝を守ることによって、神の恵みに生かされていることを確認し、人間を回復する日であった。人は休みなく働き過ぎると自分自身を失う。イスラエルの洞察に富んだ人間理解を見ることができる。この戒めはバビロン捕囚時代、奴隷とされていたイスラエルの民が宗教的理由によって休みを取る抵抗権として作用し、この頃から安息日が厳格に守られるようになったと言われている。ところが主イエスの時代、煩雑な規定に膨れあがっていた。地面に字を書けば、字が残るので労働になるが、水に字を書いても残らない。これは労働に当たるかどうかの議論があったという。安息日の規定は民衆をがんにがらめにしていた。そのような中で、上記の事件が起こったのである。

主イエスは安息日に会堂で教えておられた。そこに、18年間も病の霊に取りつかれ、腰が曲がり、伸ばすことのできない女性がいた。主イエスは彼女を呼び寄せ「婦人よ、病気は治った」と言い、手を置かれた。すると、腰は真っ直ぐになり、長年の病をいやされた彼女は歓喜し、神を賛美した。これを見た会堂長は怒り、群衆に向かって「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない」と叫んだ。治療ではない傷の手当てなどは許されていたが、病気を治すことは労働に当たると禁止されていたからである。主イエスは「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年間も間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか」と応じられた。律法厳守を主張する会堂長を支持していた人々は恥じ入ったという。彼らはまだ聞く耳を持っていたということであろうか。群衆は、主イエスのいやしと言葉を喜び合った。「安息日論争」と言われる事件である。マルコ福音書 2章 27節 bには「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と書かれている。安息日は人間回復のための日であるが、律法学者たちは宗教的権威を笠に着て、規定によって民衆を束縛し、生きる者をも殺していたのである。

法は共に生きるためのものであるが、権力者たちは逆に殺すように運用することがある。自民党が目指している憲法改定案は国による国民支配を優先させ、立憲主義を否定し、自由に基づいた国民主権を脅かすものである。認めることはできない。